
機械仕掛けの箒星

伊南屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの篝星

【Nコード】

N4245U

【作者名】

伊南屋

【あらすじ】

魔法が発展した世界。魔法によるレースを変わり者の少年と落ちこぼれの少女が駆け抜ける異世界レースアクション。

プロローグ

巨大な渓谷を、縫うように翔る影があった。その数は八。どれもが時折淡い燐光を放ちながら抜きつ抜かれつを繰り返し、南へと向かっていく。

渓谷は歓声に包まれていた。全長10キロメートル以上に及ぶ深い渓谷には、よく見れば断崖に幾つもの穴が開き、そこには無数の人がひしめき合い、声を張り上げていた。

誰もが熱狂し、その瞳を向ける八つの影はその全てが速さを競い合うレーサーであり、誰よりも速く終着点に辿り着こうとしていた。箒を模したような小型の魔導機にその身一つで跨がり、互いの速さの限界を競い合う。

剥き出しの体は高速で翔ている。一つ間違えて渓谷の壁面に衝突でもすれば紙細工も同然に体が砕けても疑問はない。

それでも尚、危険に身を晒し、それしか知らないかの様にひたむきに速度を追い求める姿はあらゆる人を魅了する。

老若男女がレースに熱狂した。

影の一つが更なる加速を見せれば、一際大きな歓声が上がリ、それに追いつがる影があれば歓声は更に増す。

沸点の無い熱気はこのレースに対する人々の情熱そのものだ。

曲がりくねった渓谷を進み、やがてレースが終わりに近づく。その先は渓谷が海へと開いており、巨大な船上の頂に用意された旗がたなびいている。

それを掴む者こそが王者を示す御旗。

八つの影全てが、その旗に向かって最後の加速をしていく。それぞれの魔導機が次々と臨界を迎え、機関部から先程から散っていた燐光とは違う、激しい光を放ち始める。

長く尾を引くような光の群れ。その様はまさしく箒星だ。

長く尾を引く彗星が王者の証目掛けて飛来する。

シューティングスターレース。その名をそのまま示すような情景は観客を更なる熱狂へと押し上げる。

流れ星の一つ。誰よりも鋭い加速を見せた蒼い光が遂に旗を掴み取った。

歓声は割れんばかりに響き渡り、怒号、悲鳴、嬌声と入り混じる様は混沌そのものだった。

観る者も、参加する者もこのレースに全てを傾けていた。誰も彼も熱狂する中で、それを冷たい目で見るとしたら、それは一体何を思うのか。

これは。

世界に取り残された天才と、時代に取り残された落ちこぼれが出会う。そんなお話。

かつて人々を苦しめた世界全てを巻き込む戦乱が過ぎ去り幾歳月。その傷痕がなくなるとも、人の記憶は薄れる程度には時間は偉大な癒し手であった。

時間は、かつては限られた人間の特権であり、軍事利用されていた「魔法」というものを、世間の人々の生活にまで浸透させた。

人々の命を奪う為に発展した技術が、今や人々の生活の根幹を支える一柱にまでなれたのは人々が魔法というものへの畏怖以上にその利便性を受け入れたからだろう。かくして世界は一応の平和を手に入れ、めざましい復興を遂げた。

やがて平穏が退屈に変わると、魔法は娯楽に転用され始めた。魔法を用いて飛行する魔導機による競争。

最初は子供の駆け足のようにささやかな物だったに違いない。しかしそれに楽しみを見出した者が、速さを競い始めた。比較的
に生活に余裕のある者が速さに優れた魔導機を特別に作る。

それを他の人間も真似を始め、広がる波紋は魔導機を生産する者

にも影響を与えた。

魔導機が速さを追求し始めた頃には、街中は彼らが走るには狭すぎていた。

目を付けられたらのは戦乱時に大規模な戦略級大規模魔法により世界中に開いた、「悪魔の口」と呼ばれる地の裂け目だった。

魔法の名残で魔素を多く含んだ大気が断崖に溜まり、複雑に罅割れた地形はそのまま天然のコースとなった。

速さを競い合う者達が集まり、集落を成し、時に渓谷を改造した。やがてそのレースを見ようと観客が集まり集落は巨大化、都市化に向かつていった。

レースは競技人口が増え、観客を巻き込んだ娯楽化が進み、やがて多くの人により運営が為される大会へと進化した。

そして、戦乱後に腫れ物を触るように扱われた魔術師達はレースに魔導機の乗り手として次々に参加。かつての軍人達はレーサーとして返り咲くに至る。

「だから？」

昼時の大衆食堂。目の前の中年男の解説をひとしきり聞いて、少年は率直な感想を口にした。

真昼の内から酒に酔った中年男に今日のレースを観たか聴かれ、率直に「興味がない」と少年が答えた事で、熱心なレースファンであるらしい男は長々と講釈を垂れ始めた。

一から十まで、この街の人間であれば誰でも知っていそうな事を語られ、少年の表情はうんざりと言った風情だった。

「だからって……だからだなあ、シューティングスターレースをつまらないだなどと抜かすのはレースの歴史を知ってからのたまえて事を俺は」

「うん。歴史を知った上で言うよ。つまらない」

中年男の言葉を遮って少年は目深に被ったフードの下、灰色がかった前髪から覗く伶俐な瞳を幾らか眠そうにさせながら答えた。

「……のガキ」

「大体、レースの歴史とレースの面白さは無関係じゃ？」

「ほおう……ならお前がつまらないと思う理由を言えよ」

「……絶対的王者による独裁」

「あ？」

「どのレースにしたって「蒼雷のリン」の一人勝ちだ。結果が見え透いてつまらない」

溜め息混じりに少年が答えると、中年男は更に鼻息を荒くして食って掛かる。

「良いじゃねえか！ 絶対的王者！ みんなの英雄だぜ！？」

「……確かに今はみんなのヒーローだ。でもそれはレースを廃れさせるよ？ ……そうだな、明日のレースは誰が勝つと思う？」

「そりゃあ「蒼雷」に決まってらあ！」

「そうだね。僕もそう思う。だから明日のレースは観ない。あんたは？」

「いや、俺も明日はなあ……今日観てきたし」

「それだよ」

少年がしたり顔で続ける。

「結果の分かりきったレースじゃ、観客の興味も薄れていく。番狂わせのないレースなんてつまらないからね」

「だがしかしだな！」

中年男が興奮に声を荒げた所で飛来した円盤が中年男の頭の後ろから直撃した。

「んがつ！？ んなあにをしゃがる！」

「うるさい」

円盤の飛来した方向から冷たい声が飛んでくる。床にカラカラと音を立てて落下した円盤は店の料理を運ぶトレイだった。

「他のお客さんに迷惑」

「てめえ！ 客にトレイぶつけてなんつつ言い草だ！ この爆発娘！」

爆発娘と言われた張本人

この店の店員らしい赤毛の少女は無

表情のまま方眉をぴくりとさせた。

「どうやら不機嫌を表す仕草らしいが如何せん感情に乏しい表情の為、読み取るのは難しい。」

少女はつかつかと中年男に歩み寄ると、腰を落としていた男の頭に、そつと手を添えた。

「爆発……させようか？」

「は……いや、冗談だよな？」

「どう思う？」

「……は、ハツタリだな！ 俺を脅かそうたってそうは」

「えい」

少女の小さく掛け声を上げると共に、男の頭から小さな爆発音と煙が上がった。

「ひゃあああ！？ え？ あ？ 生きてる？」

目を瞑って悲鳴を上げた男だったが、数秒の硬直の後、自らの頭に手を伸ばす。

それと同時に、男の頭を隠すように上がっていた煙が空気に流され消えていく。

「な、なんじゃこりゃあ！？」

そこには無造作に伸びていた髪の毛の面影はなく、頭を倍以上に大きく見せる、ちりちりと縮れて丸い茂みとなった頭髪があった。

「サングラスが似合いそうね」

無表情の口だけを酷薄な笑みの形にして少女が言う。

「ま、頭があるだけましでしょ？」

「おま、おま、おまえ……覚えてるよ！」

慌てふためき立ち上がった男は、捨て台詞を吐くと脱兎の如く店から逃げていった。

ふと男が居たテーブルの上を見ると、しっかり代金は置いてあり、意外と律儀な男だったらしい。

「……あなたも、余り人を挑発するような事は言わないで」

今度は冷たい美貌を少年に向けて言う。しかし、少年の顔には好

奇の表情と笑みが浮かんでいた。

「爆発娘？」

「そう呼ばれるのは好きじゃないわ」

「……フェイリス・アルバートさん？」

「どうして私の名を？」

「これは失礼。僕はリロイ・バーニンガムと言います」

大人びた口調で少年が答える。軽くお辞儀をしながらフードを外す仕草も落ち着き払ったもので、それもまた大人びていた。

「実は……貴女を探していたんです」

「あなた……なに？」

少年からフェイリス・アルバートと呼ばれた少女は訝しげに問い質す。

「僕が何か？ 僕が何かと尋ねられたならばこう答えましょう」

「僕、リロイ・バーニンガムは……科学者であると」

？

リロイ・バーニンガムは思う。

世の中は不公平であると。

彼の生い立ちには平凡極まりない。どこにでも居る夫婦の間に次男として生まれ、どこにでもあるような生活をして育った。

彼が世の不公平に気付いたのは彼が六歳の時だ。

小等教育が始まり、初めての魔法学科教育が行われた。周囲がたどどしくも初歩の初歩である燐光^{ライト}の魔法を行い、自らの指先に光を灯す中、彼の指先だけは普段と変わらないままだった。

その後も魔法の学科が行われる度、彼はどれ一つとして成功出来ず、その事實はやがて級友達のからかいのタネになった。

他の学科がいくら優秀であろうと、この世界の生活の根幹を成すにまで至った魔法を行使出来ない事は、周囲から見れば劣等と呼ぶに値した。

月日が経ち、彼等が成長するにつれそれはエスカレートし、からかいは暴力を含むものになっていった。

級友達に馬鹿にされ、お前は魔法を使えないと揶揄されたが、それでもリロイは努力を怠る事なく、魔法を成功させようとした。

彼は図書館に通い詰めあらゆる書物を読み漁り、学んだ。

だがその全ては実を結ばなかった。

ただ その代わりに得る物があった。

魔法が人々の生活を支える中、道楽や玩具遊びと言われるような物ではないそれは、彼にとっては魔法に代替し得る素晴らしい物だった。

彼は図書館に収められていた数冊の本を借り出し、その日の内に全てを読み尽くし、最初に得た予感を確信に変えた。

かくして、リロイ・バーニンガムは科学者の一步を踏み出したのであった。

「科学者？ 酔狂な肩書きを名乗るのね、貴方」

フェイリスの問い掛けに、皮肉った笑みで肩を竦めて少年は答えた。

「酔狂だなんてとんでもない。僕は至って真面目ですよ。まあ商売相手はもっぱら伊達や酔狂の変人ばかりですが」

「……それで？ 貴方が科学者である事と私にどんな関係があるの？」

「そうですね。エンジンという物をご存知で？」

「……いいえ」

「でしょうね。まあ大雑把に言うとお爆発の力を推進力等に変える機関の事です。昨年、その実物公開と論文発表を同時に行った人が居まして。まあ随分な驚きに満ちて受け入れられました。科学者のみにですがね」

爆発という単語にフェイリスが方眉をびくりとさせる。

「昨年のは蒸気機関エンジンだったんですが。いや、やられましたね着想自体は僕もあつたんですよ？ しかし如何せん齡十五の若輩では資金力が違いますからね。」

思考は我が身一つで出来ませんが形に為すのはそうもいかない。僕が小型レプリカにアルコールランプで四苦八苦してる間に大型魔導機サイズの蒸気機関を利用した車を作られてしまいました。

論文だけでも提出しておくべきだったなあ。ああでもやはり実証が伴わない研究は僕の主義に反するしなあ」

「ちよ、ちよつと待って！」

「はい？」

「結局、私に何の用なの？」

フェイリスが途端に饒舌になったりロイを制して尋ねると、ロイは苦笑を浮かべた。

「すいません。どうにもこの手の話は止まらなくて」

照れを隠すようにロイは咳払いをすると指をピンと立てた。

「問題はサイズなんです」

「え？」

「何故大型魔導機サイズだったのか。まあ端的に言って一番の要因は燃料なわけです。石炭を使い、長距離間の駆動を目指すなら石炭を大量に積まなくてはならない。」

石炭を積むのは蒸気機関車本体ですから車両自体を大きくせざるを得ない。それに合わせて出力の確保の為にエンジンも巨大化する」

「だからそれが一体」

「ネットクは燃料なんですよね。そこで考えた訳ですよ。爆発を魔法によって行えば機関の小型化を出来ると。そこで貴女なんです」

ロイのその言葉にフェイリスはあからさまに眉をしかめた。

厳しい視線をロイに送り、押し殺した声で言葉を発した。

「だから私が必要？ 馬鹿言わないで」

「馬鹿じゃないですよ。もう貴女に決めました」

「何故」

「先程の男性の頭」

ロイは指先で自らの頭を指差し、にやりと笑う。

「僕が貴女に目星を付けてから抱えた不安は爆発のコントロールです。でもその不安はもうなくなりました。」

先程の爆発。男性に怪我をさせずに頭髪だけに熱を与えていた。

貴女の爆発に対する高いコントロール能力を示す証左です」

それから思い出したように手を叩いて続ける。

「そうそう。不安はもう一つ。貴女の運動能力ですが……あのトレイ投げ見事でしたね。運動能力も高そうですね。うん、やっぱり貴女しかいないですね」

朗らかな笑顔を浮かべるロイに対して、フェイリスは険しい表

情のままだった。

「一方的に話を進めないで。……私はやらないわ」

「やって下さいお願いします」

「……貴方が自分でやれば良いじゃない」

「そももいかないんですよ。僕魔法使えませんから」

「簡単な爆発の魔法くらい」

「もう一度言います。僕は魔法を使えません。これは比較的にではなく絶対的にです」

「え？」

「僕は生まれてこの方、魔法を使った事がありません」

？

フエイリス・アルバートは劣等生である。

彼女が魔法を使えば大抵魔力の固定化がままならず単純なエネルギーとして放出され爆発になってしまう。

その事は長年彼女を苦しめた。

周囲が次々と新たな魔術を会得していく中、彼女だけは炎と煙にまみれるだけだった。

どれだけ魔力を調整しようと爆発の規模が変わるだけで結果そのものが変わるわけではない。

周囲から馬鹿にされ続けた彼女はいつしか表情を凍らせ言葉少なになっていった。

友人も出来ず、中等教育を終えるまで彼女は孤独な学生生活を送り、高等教育に移る前に働き始めた。

どうせどれだけ学ぼうと変わらない。自分は魔術を用いない職に就くしかないのだという諦観がそうさせた。

ウェイトレスを始めた彼女は実直に働いた。常連客に自分の魔法について知られ、爆発娘という、彼女にとって屈辱的な渾名をつけられてもそれは変わらなかった。

店主夫妻はそんな彼女を気に入ってくれたし、馬鹿にされる事は慣れていたので辛いとは感じなかった。

ただ時折、街中なら様々な所から眺める事の出来るシューティングスターレースを眺めては、あんな風に空を翔てみたいという憧れを膨らませた。

それが叶わないと思いつながらも、そう思ってしまう自分が、彼女は大嫌いだった。

街中が歓声に包まれていた。

昨日に引き続きの、王者「蒼雷のライオン」がするレースとあつてライオンのファンが歓声を上げている。

それを、観客席の外からフェイリスは眺めていた。

レースは佳境。蒼い燐光が尾を引いて流れていく。フェイリスはそれを、単純に綺麗だと思う。

魔力の発現によつて魔素が発光を起こす事で燐光は放たれる。それは本人の資質に左右される。故に燐光はその本人のパーソナルカラーとして捉えられる。

しかし、フェイリスは自らの燐光を見た事がない。燐光が放たれるより先に爆発が起きるからだ。

果たして自分の燐光は如何なる色なのか。

憧れを胸にレースを眺めるのにも痛みが伴うのは、自分の劣等感も根深いと嘆息せざるを得ない。

見上げた空にはいくつもの燐光が舞っている。あの光の中に自分も入ることが出来るなら、それはどんなに素晴らしいことだろう。しかし、その憧れを自分は否定しなくてはいけない。

振り払うように頭を振って、レースから視線を外す。せつかくの休みなのだ、こんな陰鬱な気分でいるのは勿体無い。

立ち並ぶ店の中でもお菓子をとり扱う屋台に視線を移して見て回る。店によつて様々な甘い香りや果物の香りを楽しみながらどれを

買おうかと考える。

甘い物好きという女の子らしい趣味は、彼女の数少ない楽しみの一つだった。

陰鬱な気分が薄らいでいくのを自覚しながら店を回っていると、聞き覚えのある声が聴こえてきた。

「ああ、すいません。そのシロップもつと多くしてもらえますか。もつと……ええ、それくらいで。どうも」

見ると、昨日店に訪れた少年　リロイがいた。手にはこの辺でも特別甘いと有名なワツフルに滴る程のシロップをかけた代物を持っている。いくら甘い物好きを自負するフェイリスでも、それを食べるところを想像すると胸焼けを起こしそうになる程のものだった。せつかくの甘いものを食べようという氣勢を削がれてしまい思わずため息を漏らす。

「何をしてるの貴方」

これも何かの縁かと思い、なんとはなしに今まさにワツフルにかぶりつこうとしていたリロイに背後から声をかける。

「おや、こんな所で奇遇ですね」

「なによそれ？」

手にもったワツフルを指して言うと、リロイはそれを掲げて見せた。

「特製ワツフルです。甘いものは頭脳労働に不可欠なので」

「それにしたって度があるでしょう。そこまで行くと美味しくなさそうだし」

「美味しくありませんよ？　そもそも甘いもの、そんなに好きじゃありませんし」

キョトンとした顔で言うリロイを、怪しむように睨んで溜息を吐き出すと、フェイリスはワツフルを取り上げる。

「体壊すわよ。こんなの食べてたら」

「すいません。心配していただいて」

リロイが苦笑するのを見て、フェイリスは脱力してしまう。

大人びた表情を見せたかと思うと、歳相応の少年らしい表情も覗かせる。不思議な雰囲気をもとつた少年だとフェイリスは感じる。不意に周囲で歓声が上がった。二人揃ってコースに視線を向けると青い光が驚異的な加速で後続を引き離しにかかる場所だった。フェイリスは鮮烈なまでに舞い散る蒼い光に目を奪われ微動だにできなくなってしまう。

「……憧れますか」

まるでフェイリスの内心を見透かすようにリロイが言う。

フェイリスは自分が馬鹿にされたような気がして、見上げた視線を鋭くしてリロイに向けた。

しかし、見つめたりロイの表情は真剣そのものだった。

「僕もね、憧れます。あんな風に自由に空を飛べたらって」

リロイは薄く笑ってレースに視線を戻した。

「昨日、つまらないって言いましたけど、あれは負け惜しみです」

少し躊躇うように区切ってからリロイは続けた。

「魔法を使えないのは不便です。昨日も話しましたが僕は魔法を一切使えません。詳しく言うと魔素、及び魔力を用いた技術全てです。魔力を原動力とする魔導機も、魔素の放つ燐光を灯りとする照明も。複雑だろうが単純だろうが関係なく使えません」

今の時代においてそれは致命的なまでの欠点だ。劣等とすら言えない。現在あるありとあらゆる文明の利器が使えないのだ。

「でも……でもですよ？ 僕は諦めていません。あの自由な空を」

「……本当に飛べると思ってるの？」

「当然です。今はまだ無理ですがいずれ全く魔力を介さない飛行機関も作り上げるつもりですよ僕は。そうして僕自身もあの空を手に入れます」

答えたりロイの瞳には強い意思が感じられた。

自分より絶望的だろうに。憧れるだけの自分とは違い、それを現実に変えようとするリロイをフェイリスは羨ましかった。

いや。

羨むだけでは、憧れるだけでは駄目なのだ。

「私は飛べる？」

「当然です。しかも飛ぶだけじゃない。誰よりも早く飛べますよ。いえ、僕が誰よりも早く飛べせます」

「誰よりも……？」

フェイリスの問い掛けに、リロイは不敵な笑を浮かべて指を指した。指先の向かう先はレースであり、その先頭を翔る蒼い光だった。「僕達の目標は一つ。「蒼雷のライン」の王座陥落」

「な……」

「レースを引つ繰り返します。僕の科学で」

？

断崖都市。

レースの発展と共に反映していった都市は常にレース場である地の裂け目、その岩壁に作られていく。

最初は地上のみにあったそれも、時を重ねるにつれ地下、つまり岸壁をくり貫かれて広がっていった。レースを観戦できるようにコースに沿って岩壁には窓型に穴が開いており断崖側にはコース、その反対側には観客向けの飲食店が立ち並んでいる。

フェイリスが働く食堂もその一角にあり、フェイリス自身の住まいもそこから少し奥まった地下住宅である。コースに近ければ近い程人が多く、位置は高ければ高いほど裕福な傾向にある。

高さで言えば中層に住まうフェイリスはリロイが住居に案内すると言われ、予想していたのは自分の住居と大差ないものだった。

だが、実際に案内されたのはかなり奥まった区画であった。奥へ奥へと歩くにつれ明かりが減っていき、壁面も剥き出しの岩壁になつていき最早ただの洞窟と変わりない様相を呈していた。

「こんな所まで広がってたんだ」

「まあ割と最近ですね。色々と不便もありますが、慣れればどうと

いうこともありませんしね。さあここです」

リロイが言うと岩壁の一部に取り付けられた扉の前に立ち止まる。岩壁に不釣合なほどしっかりした作りの扉をリロイが開く。

促され中に入ったフェイリスは思わず感嘆の声を上げた。

「何これ……」

中は意外なほど広い。が、如何せん物が多い。フェイリスには見た目からどういった用途で使うのか分からない工具や、作りかけと思われる機械の部品。棚やテーブルにはガラス製の容器に収められた薬品等が所狭しと散乱している。

「すいません散らかっていて。歩みにくいでしょうが気を付けて。奥に貴女に見せたいものがあるんです」

リロイが先導して歩いていくのを後ろから追いかける。所々躓きそうになるのをなんとか回避しながら移動していくと部屋の奥に更に扉があるのに気付いた。

リロイがそれに手を掛けて押していくと、鉄製の扉が重い軋みを上げて開いていく。

「さあ、ここです」

光のない室内で最初に感じたのは油の臭い。暗い室内には何があるかは見て取れない。

それを察したのかリロイが扉横にあるスイッチを操作すると、天井に取り付けられた照明が一齐に光を灯した。

そうすることで浮かび上がったのは、一つの魔導機。しかしそれは一般的な魔導機とは一線を画した異容であった。

第一に、一人乗りにしては大き過ぎる。一般的なレース仕様のスマートフォンとはかけ離れた無骨なフォルムは至るところに取り付けられた機械類が原因だろう。だが、その中で異彩を放つのは機体後部に取り付けられた部分だ。

「それが気になりますか？」

「これは？」

「それがエンジンです。まだ試作段階ですが、これから貴女の協力

次第で完成します。これがこの機体の心臓になる部分です」

そう言ってリロイがエンジンに触れる。いくつものパイプが繋がられたそれは、まさに心臓だ。

「これから翼も付けていかなくてもなりませんし、調整も考えればそれなりの時間を要することになります。しかしこれが完成すれば僕達はきっと誰よりも早く飛べる。そう信じています」

「これがあれば、飛べる……」

「そうです」

「信じていい？」

「一つ良いことを教えましょう」

そう言ってリロイは人差し指を立てて、不敵な笑みを浮かべた。

「科学者は実現可能な事しか考えません。破天荒に見えてもそれはあらゆる法則や、理論、数値から導き出される“答え”なのです。ですから「飛べる」というのは実現可能な答えなのです」

リロイが身をどかし、フェイリスに道を開ける。

「さあ、触れてみて下さい。貴女の翼に」

恐る恐るフェイリスが歩を進める。機体の傍に寄ってリロイを見ると、彼は力強く頷いてみせた。

そつと手を伸ばして触れる。金属の冷たい質感と、確固たる力を感じさせる硬質さ。指を滑らせ、エンジンに触れる。

「……」

そつと触れたそこから、フェイリスは鼓動を感じた気がした。これがあれば飛べると彼は言う。それを信じるに値するかどうかは未だ分からない。それでも信じてみたいと思う。飛んでみせると宣言した彼の瞳を見た瞬間からある予感をフェイリスは信じたい。

飛べる。

彼はそう信じている。ならばそれを自分も信じてみたい。

少なくとも憧れるだけで何もしない自分を捨て去りたい。

希望がないと思ひ込むのはもう止めるのだ。彼でさえ捨てていない希望をどうして自分が捨てられようか。

フェイリスは自分がそんな情けない人間だとは思いたくなかった。

「私が手伝えばこれは完成するのよね？」

「完成します」

「じゃあ……手伝う」

フェイリスの言葉に、リロイの表情が一息に明るくなる。

「本当ですか！？ ……ありがとうございます」

両の手をリロイに取られ、握られる。驚いて見たリロイの顔は無邪気そのものだった。

「僕達なら飛べます。きっと誰よりも速く」

「ええ、きつと」

フェイリスは信じることにした。

彼の信じる科学の力ではなく、彼自身を。

誰よりも速く飛べると信じる彼の想いを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4245u/>

機械仕掛けの篝星

2011年7月3日03時31分発行